

- まであり、37 (1998), 513.
- 9) プレス成形難易ハンドブック, 日刊工業新聞社, (1996), 39.
- 10) プレス成形難易ハンドブック, 日刊工業新聞社, (1996), 62.
- 11) K. Miura, T. Hira and T. Kato: Proc. Int. Symp. on IDDRG, Lisbon, (1994), 85.
- 12) プレス成形難易ハンドブック, 日刊工業新聞社, (1996), 341.
- 13) K. Sakata, S. Satoh, T. Kato and O. Hashimoto: Proc. Int. Symp. on Physical Metallurgy of IF Steels, Tokyo, (1994), 279.
- 14) E. Yasuhara, K. Sakata, T. Kato and O. Hashimoto: ISIJ Internatiol, 34 (1994), 99.
- 15) 坂田 敬, 奥田金晴, 瀬戸洋一, 小原 隆: 鉄と鋼, 83 (1997), 55.
- 16) 武智 弘: 自動車用材料シンポジウム, 日本鉄鋼協会, (1997), 3.
- 17) K. Miura, S. Takagi, T. Hira, O. Furukimi and S. Tanimura: SAE Technical Paper Series 980952, SAE, (1998)
- 18) 高橋 学, 上西朗弘, 栗山幸久, 岸田宏司: 自動車用材料シンポジウム, 日本鉄鋼協会, (1997), 41.
- 19) 渡辺憲一, 岩谷二郎, 岡野洋一郎: 自動車用材料シンポジウム, 日本鉄鋼協会, (1997), 73.
- 20) 林 宏信, 真柄秀一, 高原正雄: 自動車技術会学術講演会前刷集, 自動車技術会, 936 (1993), 193.
- 21) 篠崎正利, 加藤俊之, 入江敏夫, 高橋 功: 鉄と鋼, 68 (1982), 318.
- (1999年12月24日受付)

ふえらむの窓

古代製鉄史における3つの謎

著名なルドウィヒ・ベックの大著「技術的・文化史的にみた鉄の歴史」(訳: 中澤護人 発行: たたら書房(第1巻昭和49年刊))の初版刊行からすでに四半世紀が過ぎ、ドイツ語の初版からは100年以上の時が流れている。

筆者は、このほど改めてローマ時代までの古代編(第1巻第2分冊の途中まで)を通読する機会があった。

うかつなことに、この本の標題に「技術的・文化的にみた」という形容詞句が付いていることを初めて認識したしだいである。ベックは序章において、「金属は、われわれの近代文化の基盤であり、道具、武器、機械を供給し、人類はこれを利用して、現在のような地位を獲得した。従って、この金属の利用の歴史は、人類発展史の重要な部分である。」と述べており、ここに標題の形容詞句の意義がある。

和訳版は、著者と訳者が、それぞれ精力的に、金属を媒介とする人類発展の歴史を考察したもので、名著といって過言ではない。

歴史も古代に遡るほど情報や物証が少なくなるのはやむを得ないことであるが、この本から筆者が強い印象を受けた論点を「古代製鉄史の3つの謎」として以下に列記してご紹介したい。

興味のある読者は、必ずしも通説に拘らない著者と訳者の考察の一端にふれていただきたい。

1. 「石器→青銅器→鉄器」とされる「継起説」は、正しいか?
2. 「隕鉄」は、人類が初めて手にした鉄であったのか?
3. 「鉄の発祥の地」としてヒッタイトを挙げるのは、正しいか?

(住友金属ビジネス企画(株) 佐藤 駿 2000年2月23日受付)